特 別 寄 稿

ウクライナ 訪 問 記

笠松 泰洋

戦時下の国を訪問する、というのは、普通ではないことであり、推奨するべきことでもない。現在もウクライナは日本の外務省からは、危険ランク４、即座に退避する地域、とされている。そのウクライナから招かれた。

私が作曲したオペラ「人魚姫」の上演が決まったので、それのプレミア（初日）に立ち会って欲しい、という依頼だった。ウクライナ西部の古都、リヴィウの、リヴィウナショナルオペラからの依頼だった。

ロシアのウクライナ侵攻により、戦争と文化についていろいろ考えるようになった。モーツァルトがオペラを作ったのも、戦時下だということを知った。ハプスブルク帝国の皇帝、ヨーゼフ２世は、モーツァルトに「こんな時こそ、民の心を明るくする朗らかなオペラを」と新作を依頼したのである。少なくとも西洋音楽が発達する17 世紀から 20 世紀は、ヨーロッパはほとんどいつでも戦争や内戦があった。人生の中でペストにも戦争にも遭わずに済んだ作曲家はほとんどいなかったのだ。それに気がついて、そのような中で人々は音楽に何を求め、作曲家は作曲に何を込めるのか、とても知りたくなった。

ワルシャワまで飛行機で行き、空港にオペラ座の人が車で迎えに来てくれた。車で走ると、ポーランドは延々と森、または平原が続く。国境にはいかめしいゲートはあるが、ただの地続きである。そして国境から 60 キロほどで目指すリヴィウに入った。ずっと田園地帯だったが、一気に都市になった。市内に入ると、車は渋滞して、あふれんばかりの人がいた。夕方のラッシュアワーだった。大きなショッピングセンターがあり、様々な店が軒を連ね、ごった返す街には戦争の匂いは全くなかった。

市の中心に 125 年の歴史を誇るオペラハウスはあった。歴史的な建造物で、まさにヨーロッパの建築物だ。高い位置に大きなポスターが３つ貼られていて、真ん中が「人魚姫」だった。建物の前では、中学生くらいの 30 人くらいの集団が記念撮影をしていた。北朝鮮の兵士が戦争に参戦した、というニュースがあったところなので、東洋人は警戒されるかと思っていたが、そんな様子は拍子抜けするくらいなかった。しかし、街で東洋人は全く見なかった。珍しい東洋人はその子供達に取り囲まれて、英語で Where are you from?と話しかけられ、from Japan、と答えると大喜び。一緒に写真を撮った。

翌日、いよいよリハーサルに立ち会った。今回のオペラはオペラ座の大ホールではなかった。新設されたばかりの、新しい作品に挑戦する「マリョルカ」という場の柿落としに、私の「人魚姫」が選ばれたのだった。何と言う名誉だろう。私の全く知らない人たちが、照明、美術、衣装、舞台監督などそれぞれのチームで、忙しく立ち回っていた。全員が、オペラの各分野に特化したプロである。

指揮者、副指揮者、伴奏ピアニストを含め、30 人以上の人が自分のオペラのためにすごい熱量で働いている。それだけで胸が熱くなった。

劇場の総監督であるヴォヴクン氏や、空港から半日以上の車の旅を共にしたオスタップ氏、そして、1 日目の練習の指揮をしてくれたまだ若い副指揮者アンドリンからは、ロシアの侵攻後に劇場が停止してから、再開されるまでの話を聞けた。やろうと思う有志を集め、何とか数ヶ月ぶりに劇場を開けたら、満員のお客が集まり、すごい熱気と感動が溢れ、劇場関係者は、こんな時だからこそアートは必要なのだと意を強くして、本格始動に力を注ぎ、それは果たされ、国からの補助は減ったけれど、お客様、協力者のお陰で、劇場はしっかりと通常通りの運営がなされている、とのことだった。

終演後は、ゲネプロに集まった劇場関係者や評論家、作曲家からいろいろな言葉をもらった。それはその翌々日の初日も同じだった。とても熱い迎えられ方をした。

そしてこの作品は今後、ずっとオペラ座の財産として演奏されていくものになった。レパートリーの中に入ったのだった。君はウクライナの歴史の一部になったのだ、と言われた。オペラ座の上演予定にモーツァルトのオペラと自分の作品が並んでいると、自分も街の一部になれた気がした。次の作品を一緒に作ろう、というお話まで頂いた。たまたま私のオペラの初日の 11 月３日は、アメリカ大統領選挙の日だった。リヴィウの人々は、口には出さないが、戦争を早く終結させることを公言しているトランプをむしろ望んでいるような気がした。早く戦争を終わらせ、戦死する人がいなくなり、徴兵されることがなくなることを望んでいるのではないだろうか。

しかし、一方で、ロシアに対する嫌悪感は、誰もが口にした。長いソビエト時代、特にスターリン時代のウクライナの被った理不尽な扱いに対する根深い嫌悪感があるように思えた。指揮をしてくれたユーリンの祖母は北方領土の島に住んでいた、と話してくれた。開拓民としての強制移住でウクライナから行ったということだった。平和な住宅地にミサイルを打ち込む狂気にさらされつつも、極めて普通に生きている、または生きようとしている街、リヴィウだった。

５日の早朝に列車でリヴィウを出た。国境を超えてポーランドに入ると、もう列車がドローンや砲撃で狙われることはない。国境線一本で仕切られているだけなのに。

車窓の風景は全く同じなのだ。地平線の広がる果てまで続く大地のどこまでをどの民族のものとするか、という争いは、結局今も続いている。宗教の違い、民族の違い、というだけで。しかし、音楽をすれば、日本人もウクライナ人もなかった。やはり、それこそが、音楽を戦時でも大切にしようという根幹ではないだろうか。